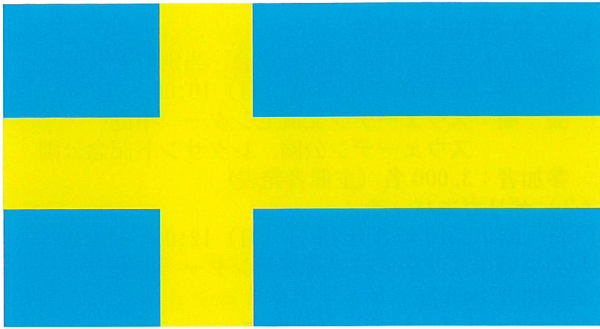


Björk

—ビヨルク(白樺)—



ストックホルム近郊の都市ハーニングに貼られている「具合が悪いときは家に居ましょう」と呼び掛ける掲示。スウェーデン語を含め8か国語で表記されています。スウェーデンが独自に行っている新型コロナウイルス対策は、世界で注目されています。

(画像提供：Sofia Malm)

令和2年度定時評議員会・第1回理事会報告	2
インタビュー「ガデリウス・ホールディング株式会社CEO ヨスタ・ティレフォッシュ」	6
報告「日本の若者の社会や国に対するユニークな意識についてのオンラインワークショップ」	10
連載寄稿「スウェーデンの現在」①	14

一般財団法人スウェーデン交流センター (理事長 内野 貢)

〒061-3777 北海道石狩郡当別町スウェーデンヒルズ・ビレッジ2丁目3番1
 TEL 0133-26-2360 FAX 0133-26-2992
<http://www.swedishcenter.or.jp/> e-mail: info@swedishcenter.or.jp

一般財団法人スウェーデン交流センター 令和元年度事業報告 / 令和2年度事業計画

令和元年5月28日(火)に評議員会・理事会を開催し、前年度の決算および事業報告、今年度の予算と事業計画が承認されました。内容は以下のとおりとなっております。

令和元年度事業報告

【Ⅰ. 評議員会・理事会の開催状況】

「評議員会」

1. 定時評議員会

日時：2019年5月28日(火) 10:30～12:00

会場：札幌プリンスホテル 国際館パミール3階「支笏」

「理事会」

1. 第1回理事会

日時：2019年5月28日(火) 13:30～15:00

会場：札幌プリンスホテル 国際館パミール3階「支笏」

2. みなし決議に関する令和元年度定時評議員会

日時：2019年6月25日(火)

内容：書面による事業報告および収支決算の承認

3. 第2回理事会

日時：2019年11月29日(金) 11:00～12:30

会場：北海道国際交流・協力総合センター 特別会議室

【Ⅱ. 事業状況】

1. 交流事業

1) 展示会(会場：スウェーデン交流センター センターホール等)

(1) ヴェヴネーテット・ダーラナ作品展「白樺と桜」

日時：2019年4月20日(土)～6月30日(日)

入場者：4,258名

ダーラナ県内の織物作家グループ「ヴェヴネーテット・ダーラナ」の9名の作家による展示会およびワークショップ。開催したワークショップは以下のとおり。

a. 「プレスレットを織る」

講師：インゲル・ニルソン氏

参加者：10名

b. 「ボンボンのキーリング」

講師：エヴァ・ネルソン氏

参加者：3名

c. 「テキスタイルのブローチ作り」

講師：オーサ・ヴィークステン・ストレムボム氏

参加者：7名

(2) アーティスト・イン・レジデンス 2019「ロベルト・オルデルゴーデン作品展」

日時：2019年7月6日(土)～9月30日(月)

入場者：1,540名 ※交流事業1-4) アーティスト・イン・レジデンスを参照

(3) スウェーデンの地域紹介シリーズ⑧「エーランド島」

日時：2019年7月6日(土)～9月29日(日)

入場者：1,533名

(4) 「北欧の先住民族 サミー」展および関連企画

会場：スウェーデン交流センター センターホール

{映画上映会：ふれあい倉庫(石狩郡当別町錦町)}

講師：エリーナ・ニョゴード氏(サミー博物館広報部長)

ダニエル・ヴィークスルンド氏(フィドル奏者)

主催：一般財団法人スウェーデン交流センター

協力：アイッテ(サミー博物館)

後援：スウェーデン大使館、当別町、当別町教育委員会、当別・レクサンド都市交流協会

本企画は宝くじの助成金(一般財団法人自治総合センターの主催する「コミュニティ助成事業」)を活用して実施した。

(5) 「ダーラヘスト SCFコレクション」展

期間：2019年2月1日(土)～開催中

場所：スウェーデン交流センター センターホール

入場者：70名(2月29日現在)

2) イベント

(1) 第36回 夏至祭

当別・レクサンド都市交流協会、当別町と共催。

日時：2019年6月23日(日) 10:00～15:00

会場：スウェーデン交流センター 中庭
スウェーデン公園、レクサンド記念公園

参加者：3,000名(主催者発表)

(2) ザリガニパーティ

日時：2019年8月18日(日) 12:00～14:00

会場：スウェーデン交流センター 中庭

参加者：47名

(3) スールストロミング試食会

日時：2019年9月8日(日) 12:00～14:00

会場：スウェーデン交流センター 中庭

参加者：19名

(4) 「クップ」普及への取り組み

①クップ体験会

日時：2019年5月～10月 毎月第4土曜開催

場所：スウェーデン交流センター 裏庭

参加者：延べ16名

②藤女子大学でのクップ体験会

日時：2019年5月26日(日) 9:00～14:00

場所：藤女子大学(石狩市花川)

参加者：21名

③道の駅とうべつでのクップ紹介企画への貸し出し

日時：2019年6月22日(土) ※悪天候により中止

場所：北欧の風 道の駅とうべつ(石狩郡当別町)

④「当別祭り(当別神社例大祭)」でのクップ体験企画への貸し出し

日時：2019年8月15日(木)、16日(金)

場所：当別神社(石狩郡当別町)

主催：あそびーの

(5) SCF ユールフェア

日時：2019年11月30日(日)～12月25日(月)

場所：スウェーデン交流センター センターホール

来場者：217名

(6) ルシア祭

日時：2019年12月8日(日) 13:00～17:00

場所：スウェーデン交流センター センターホール

来館者：85名

3) セミナー・講習会

(1) 「フィーカ」

日時：原則毎月第3土曜日 14:00～15:30開催

場所：スウェーデン交流センター センターホール

参加者：延べ39名

参加費：1回につき500円(飲み物、茶菓付)

(2) スウェーデン・セミナー 特別セミナー

日時：2019年5月28日(火) 15:30～17:00

場所：札幌プリンスホテル 国際館パミール

参加費：無料

参加者：64名

講師：ヴィクトリア・フォシュルンド=ベラス 公使参事官

目黒 聖直氏(北海道スウェーデン協会事務局長)

川崎 一彦氏(東海大学名誉教授/SCF 評議員)

(3) スウェーデン・セミナー

スウェーデンの様々な内容をテーマに、SCF 職員がセミナー形式で講義をおこなった。

日時：2019年4～7月、2020年1月開催(全6回)

場所：スウェーデン交流センター センターホール

参加者：延べ46名

参加費：1回につき500円

(4) スウェーデン語会話ミニコース

初心者を対象としてスウェーデン語会話講座を実施。

<上期>

日時：2019年6月5日(水)より 全4回

場所：札幌市男女共同参画センター 4階研修室

講師：ソフィア・ヤンベリ(SCF 職員)

参加者：延べ40名

参加費：7,000円(全4回分)

<下期>

日 時：2020年2月13日（木）より 全5回（※）
 場 所：札幌市男女共同参画センター 4階研修室
 講 師：テレース・カールソン（SCF職員）
 参加者：延べ22名
 参加費：9,000円（全5回分）
 ※3回目以降は新型コロナウイルス感染拡大により、北海道よりイベント自粛の発表があったため中止とした。

4) アーティスト・イン・レジデンス

スウェーデンの優れたハンドクラフト作家を短期滞在で招聘するプログラム。今年度のアーティストは、手工芸の盛んなエーランド島にアトリエを構え活動するガラス工芸作家、グラール技法を得意とするロベルト・オルデルゴーデン氏を招聘した。

期 間：2019年6月2日（日）～7月7日（月）
 作 家：ロベルト・オルデルゴーデン氏（ガラス作家）

- ・SCF工房での制作活動
- ・グラール技法のデモンストレーション

日 時：2019年6月15日（土）
 会 場：スウェーデン交流センターガラス工房
 参加者：15名

- ・学生対象のデモンストレーション/セミナー
- ①2019年6月22日（土）
東海大学 石塚ゼミ（デザイン学科） 15名
- ②2019年6月28日（金）
当別中学校、西当別中学校各美術部および随行者 計46名

- ・「ロベルト・オルデルゴーデン作品展」
- 期 間：2019年7月6日（土）～9月30日（月）
- 会 場：スウェーデン交流センター センターホール
来館者：1,540名

5) 人的交流支援

- （1）レクサンド高校木工科生徒の職業実習受け入れ
今年度は「経済的理由により、おといねっぶ美術工芸高校との交流を中止する」旨の連絡がレクサンド高校側よりあり、中止となった。
- （2）レクサンド高校日本語クラス生徒の日本研修受け入れ支援
2019年度の派遣は見合わせとの連絡が当別町からあり、今年度は実施されないこととなった。

6) その他（後援事業等）

- ①「スウェーデンのイメージを絵画で変えたカール・ラーション」へのセミナー講師派遣協力（SCF職員派遣）
日 時：2019年4月3日（水）9:30～11:30
場 所：北海道大学 遠友学舎（札幌市北区）
主 催：ホイスコーレ札幌
- ②「イングリッシュサマーキャンプ」への協力（SCF職員派遣）
日 時：2019年6月20日（木）11:00～17:00
場 所：札幌青少年会館（札幌市南区）
主 催：札幌創成高校
- ③「ヒルズサロン」への協力（SCF職員派遣）
日 時：2019年6月28日（金）
場 所：スウェーデンヒルズ防災センター（石狩郡当別町）
主 催：スウェーデンヒルズ町内会
- ④「異文化交流カフェ」への協力（SCF職員派遣）
日 時：2019年5月30日（木）より 全4回
場 所：風街カフェ（石狩郡当別町白樺町）
主 催：NPO法人ビョルクとうべつ
参加者：延べ39名
- ⑤映画『ハーフ』上映会およびオンライン意見交換会への協賛
日 時：2019年9月22日（日）
場 所：ABF-Huset i Huddinge（ストックホルム）
URL（Universal Research Laboratory）（東京）
主 催：Beyond 2018
- ⑥「北欧デザインを楽しむ！インテリアと暮らし（第1回）」への協力
日 時：2019年10月24日（木）
場 所：スウェーデン交流センター センターホール
主 催：NHK文化センター（講師：萩中留美子氏）

2. 広報事業

1) 広報誌「ビョルク」の発行（各2,500部）

142号：2019年4月1日、143号：2019年7月1日
 144号：2019年10月1日、145号：2020年1月1日

2) スウェーデン交流センターのホームページ・フェイスブックの随時更新

- ①フェイスブックを利用したタイムリーな情報の掲載イベントの告知・報告を行った。
- ②ホームページを整備し、イベント情報・活動報告等を随時公開した。
- ③若者を中心に人気のある「インスタグラム（写真共有サービス）」、「ツイッター（短文投稿サービス）」のアカウントを新設し、イベント告知を中心に随時更新。公開した。

3) マスメディア・取材対応

- ①雑誌「スロウな旅 北海道」車で旅する西北海道・石狩エリア編 2019年4月発行 内観・外観・展示物撮影
- ②朝日新聞社 月刊情報誌「プレミアムプレス」当別特集号 ソフィア・ヤンベリ（SCF職員）インタビュー記事掲載 2019年9月発行
- ③「北欧の風 道の駅とうべつ」当別町 道の駅室PRビデオ撮影のためのSCF収蔵品貸し出し協力 2019年10月
- ④「北海道内地域ニュース」（北海道テレビ放送）報道取材 2019年11月13日（水） オンエア

4) 資料の整備

3. 工房事業

1) ガラス作品展

期 間：2019年7月1日（月）～7月13日（土）
 会 場：「手風琴」（札幌市北区あいの里）
 今年度は「アーティスト・イン・レジデンス」事業で来日し制作活動を行ったロベルト・オルデルゴーデン氏の作品も加えて展示し、好評を得た。

2) 体験学習

- （1）吹きガラス制作体験教室（講師：甲斐裕士）
日 時：毎月第2・第4土曜日（原則予約制）
会 場：スウェーデン交流センター ガラス工芸工房
参加費：2,000円（送料別途負担）
参加者：27名
- （2）木工教室（講師：島田晶夫 / デザインスタジオシマダ）
日 時：毎月第4日曜日（原則予約制。現在は新規受付なし）
会 場：スウェーデン交流センター 木材工芸工房
参加者：45名

4. 販売事業

1) ガラス工房、木工工場の作品の販売

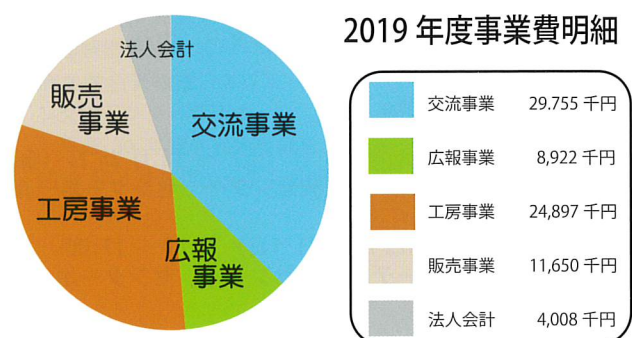
当工房で制作されたガラス作品、木工作品の展示販売を行った。2015年度より当別町の「ふるさと納税」の記念品のひとつとして取り上げられているガラス作品の販売および関係先への販売を行うと共に、外部団体の企画するイベント「サッポロ・モノヴィレッジ」にも出展した。

2) 輸入雑貨の販売

スウェーデンの民芸品であるダーラヘスト、その他スウェーデン雑貨の輸入販売を行った。

【2019年度の収支決算】

総収入は57,288千円、総支出は79,232千円。支出のうち継続事業は75,224千円、管理費は4,008千円となっており、経常増減額は-21,944千円となりました。事業費明細は下記グラフおよび表をご参照ください。



令和2年度事業計画

Ⅰ. 基本方針

令和2年度(2020年度)の事業計画については、定款に基づき、わが国とスウェーデンとの経済的・文化的交流を積極的に推進し、両国の友好親善を促進することを目的に事業を計画実施する。事業については、従来通り次の4つの事業を柱に事業を計画実施する。可能なものはインターネットを利用したオンライン開催や、インターネットの新規企画を積極的に検討しながら事業をおこなう。

交流事業：スウェーデンとの相互の産業・文化交流を目的とする派遣及び招聘並びに講演会、セミナー、講習会、展示会の開催事業。

広報事業：スウェーデンとの相互の産業・文化交流に関する情報の公開及び図書その他刊行物の発行と、インターネットでの情報発信の事業。

工房事業：スウェーデンのハンドクラフト技術の普及、日瑞作家同士の交流を目的としたガラス工房及び木工芸工房の運営。

販売事業：スウェーデンとの相互の産業・文化交流のための工芸品、民芸品及びスウェーデンデザイン雑貨等の輸入販売並びに工房の作品販売。

Ⅱ. 事業内容

1. 交流事業

1) 展示会

- (1) SCF ダーラヘストコレクション展
日時：2020年2月1日(土)～6月8日(月)
場所：スウェーデン交流センター センターホール
- (2) ポスク紹介コーナー
日時：2020年4月4日(土)～4月19日(日)
場所：スウェーデン交流センター センターホール
- (3) スウェーデンの地方紹介シリーズ⑨「ウメオー市」
日時：2020年6月13日(土)～8月16日(日)
場所：スウェーデン交流センター センターホール
- (4) 「アストリッド・グラス」展(4. AiRの項参照)
日時：2020年8月22日(土)～11月15日(日)
場所：スウェーデン交流センター センターホール
- (5) 「スウェーデンのユール」パネル展示コーナー
日時：2020年11月21日(土)～12月25日(金)
場所：スウェーデン交流センター センターホール
- (6) SCF ダーラヘストコレクション展
日時：2021年1月30日(土)～
場所：スウェーデン交流センター センターホール
- (7) ポスク紹介コーナー
日時：2021年3月19日(金)～4月4日(日)
場所：スウェーデン交流センター センターホール

2) 催事・イベント

- (1) 「クップ」普及への取り組み
日時：2020年6月～10月まで原則毎月最終土曜日
場所：スウェーデン交流センター 裏庭
- (2) ザリガニパーティ
日時：2020年8月30日(日) 12:00～14:00
場所：スウェーデン交流センター 中庭
参加費：1,300円
定員：50名
- (3) スールストロミング試食会
日時：2020年9月27日(日) 12:00～14:00
場所：スウェーデン交流センター 中庭
参加費：1,300円
定員：30名
- (4) SCF クリスマスフェア
日時：2020年11月21日(土)～12月25日(金)
場所：スウェーデン交流センター センターホール
- (5) ルシア祭
日時：2020年12月13日(日) 13:00～17:00
場所：スウェーデン交流センター センターホール

3) セミナー・講習会

- (1) 「フィーカ」
2020年度 毎月第3土曜日 14:00～15:30に開催
場所：スウェーデン交流センター センターホール
参加費：500円
- (2) 「スウェーデン・セミナー」
2020年度 毎月最終土曜日 14:00～16:00開催
場所：スウェーデン交流センター センターホール
参加費：500円(来館を伴う場合)
- (3) 「スウェーデン語会話講座」(オンラインミニレッスン)
日時：2020年5月より インターネット講座を開始予定
場所：YouTube(リンクをSCFウェブサイト、Facebook等に掲載)
講師：SCF職員
- (4) 「スウェーデン語会話講座」(対面レッスン)
日時：2020年10月より 全5回予定
場所：札幌市男女共同参画センター 4階研修室
参加費：9,000円
講師：SCF職員
- (5) 「クリスマスクラフト講習会」
日時：2020年11月21日(土)より開催
場所：スウェーデン交流センター 各工房
講師：SCF職員または外部委託講師
- (6) 特別セミナー「ヘーグベリ大使講演会」
日時：2020年11月下旬予定
場所：札幌プリンスホテル 国際館パミール
参加費：無料
講師：ペールエリック・ヘーグベリ大使

4) アーティスト・イン・レジデンス

今年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響で欧州等からの日本への入国が認められない状況が続き、事態収束の目途も立たないことから、今年度の招聘については見送りとする。

5) 人的交流支援

- (1) 日瑞両国の若者の交流企画
- (2) その他

6) その他(後援事業等)

他団体からの要請により、スウェーデンに関連したセミナーやイベントの情報提供等の協力をしていく。

2. 広報事業

- 1) 広報誌「ビョルク」(邦文)の年4回の発行。
- 2) SCFホームページ、フェイスブック等SNSの更新
- 3) 資料の整備
- 4) マスコミ対応

3. 工房事業

- 1) ガラスの作品展 札幌市北区あいの里「手風琴」を予定
- 2) 木工教室、ガラス工芸体験教室
(1) 吹きガラス制作体験教室 毎月第2・第4土曜日
(2) 木工教室 毎月第2・第4日曜日(原則予約、現在空席なし)

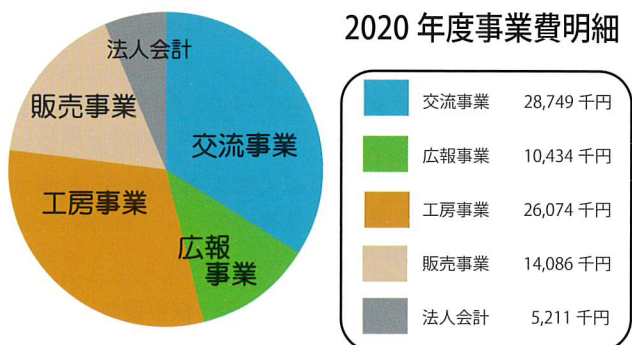
4. 販売事業

この法人の収益事業とし、ガラス工房、木工房で制作した作品の販売と、スウェーデンの優れた雑貨や民芸品の販売を積極的に行う。

【2020年度の収支予算】

2020年度の総収入は66,950千円、総支出は84,554千円を予定。支出のうち事業費総額は79,343千円、管理費は5,211千円、当期増減額は-17,604千円と予定しております。事業費明細は下記グラフ及び表をご覧ください。

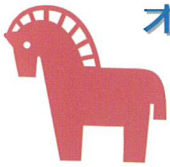
2020年度事業費明細



オンラインでの活動をはじめました

新型コロナウイルスの影響で、SCF のある北海道だけでなく全国各地で営業自粛や外出自粛を要請されるなど、個人や企業の活動に大きな制限をかけられることになったことは皆さんの記憶に新しいと思います。SCF も休館やイベントの自粛をいたしました。

そんな中でもセンターとしても活動を継続していくため、動画配信サイトでのスウェーデン語講座やオンラインショップ等、インターネットを使ったオンラインでの取り組みをはじめました。



オンラインスウェーデン語講座

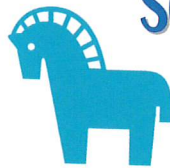
スウェーデン語の単語帳

<https://www.youtube.com/channel/UCV5Uwq0pzmUJ8d7G7XogeFw>



SCF では、定期的にセンターホールや札幌市内の施設でスウェーデン語会話教室を行っておりますが、より多くの方にスウェーデン語に触れていただけるよう、動画配信によるスウェーデン語講座「スウェーデン語の単語帳」を始めました。講師はSCF スウェーデン人スタッフのテレースが務めます。

短い動画で簡単な表現を中心に集めています、是非チャンネル登録をお願いします！



SCF ウェブショップ



SCF センターホールで取り扱っている SCF ガラス工房の作品の数々やダーラヘストなどのスウェーデンの雑貨をインターネットからでもご注文いただけるようにしました。FAX でもご注文受け付けていますので、遠くにお住いのかたはぜひご利用ください！

<http://swedishcenter.or.jp/webshop/>



柳在五 (Jai-Oh Yoo) 氏が逝去されました。

通訳・現地コーディネーターとして SCF 設立時より当財団の活動にご尽力いただき、スウェーデン大使館より北海道親善大使に任命されるなど、日瑞の交流に多大な貢献をされておりました柳在五 Jai-Oh Yoo 氏が、去る 5 月 5 日、新型コロナウイルスにより逝去されました。

柳氏は日本統治下の韓国に生まれ、朝鮮戦争後に移民としてスウェーデンに移り住みました。日本語も非常に堪能で、SCF35 周年記念行事の準備のために 2017 年に職員が訪瑞した際にもご対応くださるなど、晩年まで精力的に活動されておりました。

氏のご逝去を悼み、謹んでお悔み申し上げますとともに、故人のご活躍を偲んで当時より親交のあった SCF 元理事の戸羽氏よりいただいたメッセージをご紹介します。



そろそろ柳さんからの電話が来る頃だった。

彼はスウェーデンのリンショッピングで介護施設に入っていた。毎月一度は日本語を忘れないためにと電話をかけてくる。既に 90 歳になったそうだが、パソコンを介して日本の有力三紙、それに経済新聞を閲覧していて、日本の社会情勢には私よりも詳しい。

彼は太平洋戦争中に、日本統治下の韓国で生まれ育った。当時の文部省管轄の京城帝国大学工学部で学んだ一級建築士である。李承晩政権の時に公務員となり、大統領公邸の建築に携わった。しかし当時の韓国政府は給与の支払いが滞ることもあった。そこでたまたま募集していたスウェーデンの移民に応募し、合格した。親に仕送りをするために他に生計を得る手段はなかったらしい。

スウェーデン交流センターの設立が決まった時、貿易公団の紹介でプロジェクトに加わった。大変な親日家で、来日の際は神田の古書店に必ず現れた。そんな彼を新型コロナウイルスが襲った。

我々はまた一人親日家を失った。ご冥福を祈る。

戸羽 晟 (スウェーデン交流センター元理事)

ヨスタ・ティレフォーシュ

Intervju med Mr. Gösta Tyrefors,
CEO of Gadelius Holding Ltd.

ボルボや IKEA など、昨今日本には多くのスウェーデン企業が進出していますが、日本とスウェーデンが外交関係を結んだ明治時代も 10 年経ったころには、すでに 20 ~ 30 名ほどのスウェーデン人が日本に住んでいたという記録が残っています。そんな明治時代に一つのスウェーデン企業が日本に進出してきていたことをご存知ですか？その企業の名は「ガデリウス」。当時「ガデリウス商会」という名で横浜にオフィスを構えたこの企業は、明治時代の日本の経済成長と近代化に多大な影響を及ぼし、現在も東京にオフィスを構えて海外の優れた工業製品を日本に紹介しています。

今回はそのガデリウス・ホールディング株式会社の CEO であるヨスタ・ティレフォーシュ氏に企業の歴史や取り組みなどを伺いました。



ガデリウスの歴史

SCF 職員 (以下「-」) 本日は貴重な時間を割いていただき、ありがとうございます。それでは早速、ガデリウスのこれまでのあゆみを教えていただけますでしょうか？

(ヨスタ社長) こちらこそよろしく申し上げます。ガデリウスは 1907 年、創始者クヌート・ガデリウスによって横浜にその事務所 (当時は「ガデリウス商会」と言いました) を開設し、貿易の仕事を始めました。クヌートは産業の発展に力を注ぎ、早くからアジアに可能性を見出して、開国間もない日本の市場にスウェーデンの工業製品を広めていったのです。

彼はエリクソンやサンドピックと言った企業をはじめ、スウェーデン国内の林業・製紙業・鉄鋼業などの企業の支援を得てシンガポール、インドネシア、中国と言った東南アジアや東アジアの各国に赴き、それぞれの国の市場の可能性を見出していきました。そして日本を訪れ、この国でビジネスを始めることを決めました。これがガデリウスの始まりです。



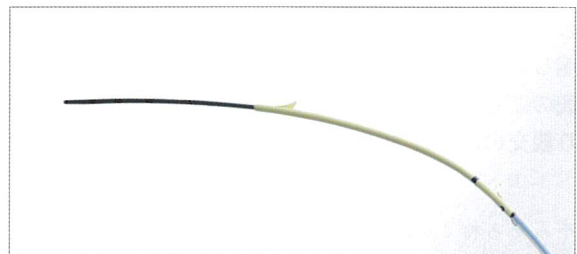
ガデリウス創始者のクヌート・ガデリウス

ガデリウス商会を設立した 1907 年当時、日本は急速に工業化を進めており、多くの工業製品を必要としました。そのため私たちはまず、スウェーデンで早くから鉄鋼製品のサプライヤーとして名が知られていたサンドピックと共に鉄や鉄鋼製品、金属製の道具の輸入をすることから

始めました。1930 年の世界恐慌やその後の第二次世界大戦の際など、時代背景により業務を止めざるを得ない状況もありましたが、戦後は日本の戦後復興のニーズに応える形でパルプ、製紙業や発電事業にも力を入れました。このように多くの事業を展開しながら、1980 年代には木製の玄関ドアなどの販売も開始しました。その後発電事業、パルプ事業などの大きな部門は分社化され、1998 年に専門商社という現在の業態に落ち着きました。

現在ガデリウスは医療、工業製品、そしてライセンス事業の三つの分野で事業を展開しています。まず一つ目の医療事業では、医療器具や医療機械、X 線検査装置、医学教育用のシミュレータなど、数多くの医療機器を取り扱い、日本に紹介しています。

今取り扱っている中でも主なものとしては、内視鏡手術で使われるドレナージカテーテルです。高齢化社会の中で、こういった製品の販売が拡大しています。



内視鏡手術用のドレナージカテーテル

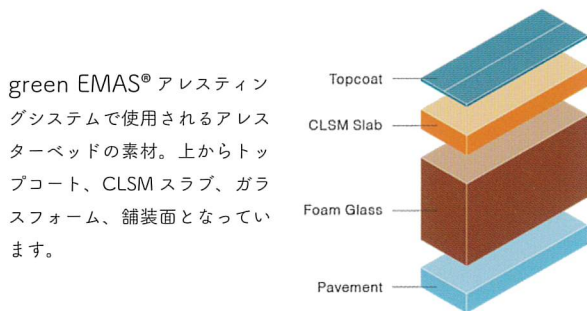
非常に多くの医療器具を扱っていらっしゃるのですね！

そうですね。そして二つ目の事業は工業製品です。ガデリウスは札幌にもオフィスを構えています。北海道では高性能・高断熱住宅向けの建築材料を主に販売しています。断熱性に優れたドアや窓、熱交換率に優れた換気システムなどを提供しています。

私たちは素晴らしい製品を数多く日本に紹介してきま

したが、同時に生産性の効率化も重要な課題として取り組んできました。スウェーデンでは企業として、昔から高い税率と高い労働力コストが課題でした。それらのコストを如何に対応するか、効率の良いものにしていくか…経営者たちは長年それで頭を悩ませてきましたね。今、製造業は日本に再び戻りつつありますが、労働者不足により生産の自動化が求められています。当社でもこれに対応するような機械を昨今多く納めています。

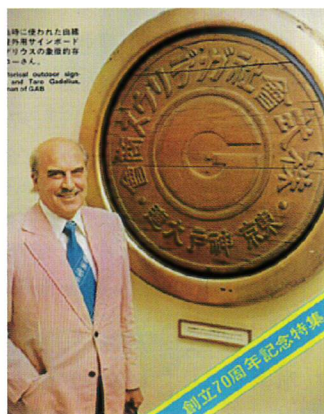
そして三つめはライセンス事業です。現在ガデリウスでは、スウェーデンのランウェイセーフ社の green EMAS®(グリーン・イーマス)と呼ばれるアレスティングシステムの日本国内導入のライセンスビジネスを行っています。green EMAS® は航空機の重量で圧潰されるように設計されたエネルギー吸収素材を用いたアレスターベッドで、滑走末端の安全領域に設置され、オーバーラン時に航空機を減速させ、安全な停止をもたらします。



このシステムは昨年、日本で初めて羽田空港のA滑走路端に導入されました。この green EMAS® は、主な資材供給も施工も日本国内でまかなわれていますが、ライセンス料をスウェーデンのランウェイセーフ社に支払うというビジネスです。これら三つがガデリウスが主として行っている事業です。

—幅広いですね！そしてこれほど多くの製品やシステムが日本に取り入れられていて、日本経済や日本人の生活にとって重要な位置を占めているとは驚きです。ガデリウス商会が事務所を開設した明治時代は、日本は工業面で目覚ましい発展を遂げました。その発展の陰にガデリウス商会の功績があったんですね。

SCF としてもガデリウスは深い関わりがあり、センター設立時には、理事としてガデリウスの当時の社長タロー・ガデリウスさんが名を連ねていました。スウェーデンに関わる団体として、意義深いものを感じます。



クヌートの息子タロー・ガデリウス



—昨今、日本に限らず、世界的に「サステナビリティ (持続可能性)」というワードが注目されていますが、ガデリ

ウスではどのような取り組みがなされていますか？

そうですね、このテーマについてはいろいろな分野で取り組んでいます。建築材料では省エネルギー住宅ですね。従来よりも効率のよいものを常に目指していますが、例えば当社の建材設備を使用した「プラス・エナジー・ハウス」という住宅があります。これは住宅で使うよりも多くのエネルギーを生み出すというコンセプトの住宅なのですが、国内に9軒あります。



スウェーデン初のプラスエナジーハウス
「Villa Åkarp」(ヴィッラ・オーカープ)

このようにサステナブルな視点で住宅を建築することは、日本では非常によい「チャンス」であるように思っています。北海道の住宅では特に、ドアや窓、断熱材が省エネ住宅を建築するにあたりとても大切な要素であるということも、道民の皆さんはよくご存じのことだと思います。

—仰る通りです、北海道に住む人々にとって、断熱性に優れた扉や窓というのは暮らしていくうえで欠かせないものですね。

—そうです。住宅や建物を建築するにあたって、日本の気候を理解し、利用することは非常に大きな可能性を秘めています。日本はスウェーデンに比べ日照時間が長いので、太陽エネルギーをうまく使うなど、効率的にエネルギーを利用できる余地が沢山残されていますね。また、今や電気自動車を手に入れられる時代になりましたが、自動車の車庫に車と同じ大きさの太陽光パネルが載っていれば、年間を通じて車を動かす電力が得られるほどです。冬のスウェーデンだったら…動かせませんね(笑)。スウェーデンは夏こそ日が長くなりますが、それでも日本では気候も含め、身の周りに多くの、そして大きな可能性が転がっている環境だと感じています。

—なるほど。このような視点で素晴らしいテクノロジーを持ち、サステナビリティについても考えているスウェーデンの企業や人々はやはり日本にとってもとても重要で、個人的な意見ですが積極的にこのビジネススタイルを日本に取り入れていってほしいですね。

私たちの国は日本とそう変わらない大きさの面積を持っていますが(スウェーデンは約45万km²、日本は約38万km²)、人口は日本のおよそ10分の一の1千万人で、その国民が使用する電力のおよそ40%程度は水力発電によって賄われています。人口が少なく、また水資源に豊かな国という背景もありますね。そして同じく約40%を原子力発電で賄っています。これはスウェーデンの国土

の地盤が安定しており、地震がほとんどないことも理由の一つに挙げられます。石炭やガスによる火力発電施設がほとんどないということは日本と大きく異なる所ですね。大きな国土と山々、豊かな水資源を持っているということはスウェーデンの人々にとってとても幸せなことです。日本は事情が異なりますので、各家庭ごとにエネルギーの自給自足ができるようになることが良いのではないかと感じています。

—そうですね、確かに北欧は水と森をとても大切にしていちゃいますね。そういった点を含めスウェーデンの電力事情はとても理に適っているように思います。

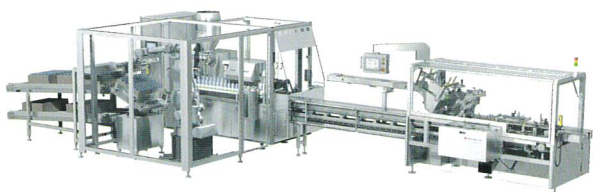
最近では、林業で出た廃棄物を基に飛行機の燃料を作るといった取り組みもありますね。森林資源は豊かなので(笑)。

電力事情を日本と比べることはフェアなことではありませんが、今日本では環境エネルギーをうまく利用することに積極的です。これはとても興味深いことです。



—現在のガデリウスはどの分野に特に注力していちゃいますか？

そうですね、先ほどのお話したように私たちは大きく三つの分野で事業を行い、多くの製品やライセンスを扱っています。それらはすべて重要なプロダクトです。そんな中でも医療分野は成長著しい分野で、その質も規模も、利益の面でも、大きなウエイトを占めており、日本にとっても重要な分野と言えるでしょう。また工業分野では昨今、再工業化の動きがあり、これまで海外で行われていた製造業が日本に戻ってきています。例えば、今多くの製品が日本国内でも生産されていますが、その多くは人の手によるものから、完全にオートメーション化された製造ラインに置き換わっていますね。オートメーション化を進めることで、日本においても労働コストを低く抑えることができます。私たちが取り扱っている製品のひとつに、スウェーデン製のチューブ充填機と呼ばれる包装機械があります。歯磨き粉やワサビ、化粧品関係のクリームなど、ペースト状のものを充填・包装する機械なのですが、再工業化の動きで自動化・ロボット化に対応する最新鋭の機械設備を国内の工場へ多く納入しています。これだけでなく私たちは毎年、いえ日々動くプロジェクト一つ一つを重要なものとして考えています。



スウェーデン・ノルデン社製のチューブ充填機



今後の展望

—ガデリウスの今後の展望についてお聞かせください。

私たちは常に新しい製品を探し出し日本国内のお客様へご紹介しています。既存顧客が興味を持つような製品ラインナップを常に更新していくことを念頭に置いています。私たちの取り組みは、1907年に横浜で事務所を開設した時から、製品を探し出して日本に紹介し、販売するという、基本的には同じことを続けてきていますが、これからの100年に向けては、より多くの製品を紹介しつつも、自社で開発した製品を世に出して発展していきたいと思っています。例えば木製玄関ドア。今日インタビューをしているこの部屋に設置したドアは、わが社がデザインし、開発したものです。



ガデリウスの自社デザイン・開発によるドア製品

これからの100年という意味では、先ほどお話した医療分野も大切です。日本の医療市場で私たちが出来ることとしては、生産性の向上に貢献すること。日本では10年、20年…40年先には今よりも高齢者層が多くなっていきます。それにより医療費が拡大し、国の予算は今よりも厳しいものになっていくように思います。ですので、より効率的に医療がおこなえるための方策を、製品の紹介を通じて私たちが提案していきたいと考えています。工業分野でも同じことを考えています。高品質を保ちながら、より少ない人数で生産性を高める自動化されたシステムをご提案していきたいと考えています。

—とても素晴らしい取り組みだと思います！当財団としても、ガデリウスのこれからの取り組みを今回のような形や、色んな方法でご紹介していけたらと思います。

ヨスタ社長について

—それでは次の質問を…。ヨスタ社長のご経歴をお伺いしてもよろしいでしょうか？

最初のキャリアとしては飛行機の操縦、パイロットをしていました。アメリカで飛行機の操縦を習い、パイロットとして働いていました。その後スウェーデンのリンショーピングでエンジニアリングとビジネスについて学び、スウェーデン国内のガデリウスで働き始めました。その後は日本に赴き、東京のスウェーデン大使館の商務部で参事官として5年間。スウェーデンの家具のプロモー

ションなども行いました。参事官の仕事の後はスウェーデンに戻って IKEA で3年、その次はいくつかのベンチャー企業の起業にゼロから関わりました。とてもエキサイティングでしたね。それからニコン・ノルディックのゼネラルマネージャーとして北ヨーロッパのエリアを担当し、2008年にガデリウスで再び働き始めました。短いですがこんな所でしょうか。

—素晴らしいご活躍の数々ですね！感服しました！休日などはどのように過ごされているのですか？ご趣味なども伺えれば…。

趣味は…そうですね、パイロットとして働いていたこともあり、小さな飛行機を操縦しますね。好きなものはたくさんあるのですが…スキーですね。クロスカントリーはあまりやっていなかったのですが、最近始めました。スノーボードもやりますね。冬はこんな所でしょうか。夏にはセーリングをしますね。

こうして挙げていくと、我ながら沢山趣味を持っていますね。ガデリウスで扱っている製品と同じように(笑)。

—(笑)

夏のスウェーデンで行うセーリングはとても素晴らしいですね。スウェーデンは夏が短いので…一ヶ月、長くても一ヶ月半でしょうか。

—そうですね。スウェーデンの夏は日が長く、素晴らしいひとときですね。

スウェーデンの夏はとても待ち遠しく、また素晴らしいものです。ただ気をつけていることがあります、いつも6月の半ばにセーリングを始めるのですが、(マリンウェアではなく)サバイバルスーツを着て行っています。夏と言ってもその時期はまだ水温が低いですからね…5℃くらいでしょうか。そんな中で水に落ちようものなら大変ですからね(笑)。それと、昔やっていたテニスも最近はやっていますね。

日本の若者に向けて

—最後に日本の若者に向けてのメッセージをお願いします。

恐れずに、クリエイティブになること。これが私が伝えたいことのキーポイントになりますね。私は仕事柄色々なところに行きますが、多くの場所で今話題の人工知能が自分たちの仕事を奪ってしまうのではないかと危惧しているという声をよく聞きます。私はそうはならない



と思っています、人工知能というものは、私たちの生活をサポートする、そんな存在になっていくと考えています。単純作業のようなノンクリエイティブな仕事というのは、いずれオートメーションに置き換わっていくでしょう。ですが、それぞれの人の発想や、物事の解決のために思考することはなくなりません。思考をクリエイティブに、クリエイティブなことをすることを恐れず、積極的に行ってください。

これはスウェーデンの話ですが、スウェーデンでは社会保障が充実しているので、収入がなくても生きていくことができます。そして、新卒入社で働いたか否か、ストレートキャリアであるかどうかを各企業は重要視しませんし、それまでの経歴が(転職市場では)評価されるので、若者自身も起業することが多いです。彼らは終身雇用で働くことを考えていません。若く、優れた教育を受けた20代半ばの若者たちが純粋な心で世界を見た時、その時こそ素晴らしいアイデアが生まれる瞬間なのだと思います。もし起業に失敗したとしても、スウェーデンの企業はその人がどんなことに挑戦したか、ということに価値を見出します。失敗することは悪いことではなく、キャリアの一つなのです。昨今の日本の雇用環境も、従来のものから少しずつオープンなものに変わってきているように感じます。恐れずにクリエイティブでいること。これが大事です。

—これからの時代にとっても重要なキーワードですね。今日はどうもありがとうございました！



発見力
つながりをみつける力

[業務内容]
美術・書道作品集・記念誌・町史・チラシ・ハガキ・
パンフレット・自費出版・インターネット事業・
各種イベント 他

Since 1912
NAKANISHI PRINTING CO., LTD.
中西印刷株式会社

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
TEL (011) 781-7501 FAX (011) 781-7516
<http://www.nakanishi-printing.co.jp/>

SCF 評議員を務めてくださっております東海大学名誉教授の川崎一彦先生は、毎年ワークショップやセミナーを開催し、北歐諸国の先進的な取り組みを日本にお住いの方々に伝えていきます。3月～4月には、政治や社会に対する関心が低いと言われていた日本の若者の意識、その背景や原因について日瑞両国からご意見を聞くべく、両国を結んでのオンラインワークショップを開催されました。今回はそのワークショップについての報告と、今後の課題についてお寄せいただきました。

「日本の若者の社会や国に対する ユニークな意識についての オンラインワークショップ」

東海大学名誉教授 川崎 一彦

背景とねらい

2019年11月に日本財団が公表した「18歳意識調査—社会や国に対する意識調査—<http://bit.ly/2E5M5Ts>」では、日本の若者のユニークさが驚くほど明確に浮き彫りになっており、自分で国や社会を変えられる、と思っている日本の若者が極端に少なく、自分の国の将来に悲観的です。

若者の意識についての日本標準は世界標準・グローバルスタンダードと大きく乖離していることが明らかになりました。

同様に、2019年6月に内閣府が公表した我が国と諸外国の若者の意識に関する調査結果でも、社会問題の解決に消極的な日本の若者の傾向を見取することができます。選挙における低い投票率、政治に対する諦め感なども長く指摘されてきました。

「サピエンス全史」などの著者で歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリさんは、コロナ危機の中、民主主義が機能しなければ全体主義化の危機があると訴えています。

日本の若者の社会や国に対する低い意識は、民主主義の根幹に関わる課題で緊急なアクションが必要とされる状況でしょう。

このような背景から、今回はまず3月8日にスウェーデン（ストックホルム大学）と日本（Universal Research Laboratory）をオンラインでつなぎ、両国の若者の社会や



3月8日に開催した
オンラインワークショップの様子。

国に対する意識の違い、そして今必要とされるアクションプランについて意見交換をし、翌月4月20日にはZoom de Neco 塾と言う場をいただき、約20名の参加者で追加の意見交換をしました。

なぜ日本の若者の意識が違うのか、 そしてどのようなアクションが必要か？

以下は前述の2回のワークショップで参加者が取り上げた、日本の若者が違う要因と、意見交換で出たアクションプランの概要です。

グループ1 『自分の意見をいう機会がない。意見を持つ

ても支援がない』

（要因・意見）日本では大人の目を気にする。目立たない方が美德。17歳のスウェーデンの環境活動家グretaさんは特別。社会問題は“他人事”。

（アクションプラン）自分の意見を言う機会をもっと作る。ファシリテーション等により話す機会を与える。そのような若者、目立つ若者を支援をする。Gretaさんのようなロールモデルを日本でも見つける。

グループ2 政治、投票への関心を高める。

（要因・意見）たとえばデンマークでは「白票」にも意味があり、無効票ではない。韓国でもかつては若者の投票率が低かった。しかし、大統領の不正に対するデモの効果があり、若者は自己効力感を得ることができた。選挙で投票するとカフェで代金を割り引いてもらえるなどのイベント化も効果があった。

（要因・意見）日本で勉強していたときの話で、私の日本人の友達Bさんは、自分は政治に関心がある方だと言っていた。しかし、政治に興味があるものの、自分の友達と政治について話すことはまずないと言っていた。理由を尋ねると、彼女は政治の話は普段誰もしないので、自分が政治の話を出すと、場の空気が重くなったり、やばい人として見られるのではないかと心配になったりするからだということであった（日本に留学したストックホルム大学生Edvardさん談）。

（アクションプラン）「白票」を無効票ではなく、カウントする。政治に参加することにより社会問題の解決に影響を与えられることを実感する。主権者教育の必要性。

グループ3 『ルールを自明のものとはしない』

（要因・意見）日本ではルールは絶対変えられないと考えている若者が多い。しかしデンマークではルールは変える必要があるかを議論する。ルールは自分たちでつくるのが民主主義。

（アクションプラン）ルールについて受動的に受け止めるだけではなく、自分たちでつくるトレーニングの必要性。

グループ4 『学校教育の諸問題』

（要因・意見）日本では自分の意見を言いにくい。だまっているのが美德。受け入れてもらえない。大学入試は正解が一つ。自分で考える必要がない。答えがあり、暗記力のテスト。

（アクションプラン）暗記型の入試やテストから考えさせる評価システムへの改革。教師の裁量、権限を拡大する。個性的でも発言する生徒を評価する。小さなことからでも責任を持たせる。

グループ5 『日本は失敗に寛容でない』

（要因・意見）北歐社会はやり直しがきく。日本でもリカレント教育がなされることが重要。

(アクションプラン) 失敗を寛容する。結果にかかわらず挑戦するプロセスを評価する。

※PISA 2018 (2019年12月3日結果公表)によれば、他のPISA参加国・地域と比べ、日本の生徒は失敗に対する恐れを感じている割合が高い。日本では77%の生徒が「自分が失敗しそうとき、他の人が自分のことをどう思うかが気になる」という見解にその通りだ又はまったくその通りだと回答した(OECD加盟国平均では56%)

札幌大通高校の

「本物の体験」を提供する取り組み

4月20日のセッションにご参加頂いた札幌大通高校西野先生のアクションに注目し、長期実践研究報告書を読ませて頂きました。

「われらの子ども」から「私の子ども」になってしまっている教育の私事化という現実(バットナム)に挑戦し、地域を巻き込んで「ほんものの体験」を提供し生徒の自己効力感を高める実践が満載されています。

“大通高校に在籍する生徒の多くは、問題・課題を多く抱えており、不登校、貧困(全校生徒のうちおよそ100名が生活保護受給世帯、200名が住民税非課税世帯)、障がい、学校不適応、渡日(帰国生徒支援)等の問題を重複して抱えている。また、自立するために活用できる資源が実に乏しい環境を生活している。または、そうした環境の中にいることで、自立しようとする意欲までも奪われてしまっている。(「本物の体験」を創り出す教師となるために - 私の中にある「北極星」を探し求めて 西野功泰 2020.3)”

大通高校は、「単位制」のカリキュラムを採用しており、午前部・午後部・夜間部の「三部制」「定時制」課程。現在の定時制高校は、中学校時代に不登校を経験した生徒や特別支援学級に在籍していた生徒、他校を辞めて転入・編入してくる生徒、家庭の経済的な理由で入学してくる生徒など、様々な経歴や事情を持った生徒が大半である。

ミツバチプロジェクト、キャリア探求の“アニマドール”プログラム、高校生チャレンジグルメコンテストなどを次々と実践されてきました。

第5章ではミツバチプロジェクトに参加したAさんの声が紹介されています。

“Aさんは小中学生の時に辛いじめを受けていた。そのため、自分の意見を他人に伝えることが怖くなり、人が嫌いになってしまった。”

“授業で、ミツバチ1匹が一生に取れるハチミツの量はティースプーン1杯(約0.3g)分なんだよって話を聞いて、ティースプーン1杯が積み重なって販売されている。ハチミツ1滴にミツバチの命が宿っている。それを知ってさらに商品の価値を感じました。人がつながっていく過程をリアルタイムに感じる事ができました。”

“彼女がミツバチプロジェクトで学び取ったことは、生きることの意味、つながりの持つ意味、そして他者と共に生きることにに対する責任である。”

そしてAさんは自ら養蜂家になるという進路選択をしました。

西野先生は“ミツバチプロジェクトにおけるAさんの学びは、人間への信頼を回復させていく軌跡である。「自分もやれる」という自己効力感を自他ともに確かなものとして感じ、高めていった彼女自身の格闘の軌跡が本物

なのである”と結んでおられます。

このような“自己効力感”を高める取り組みは大通高校のような特別な学校だけではなく、日本のすべての学校に必要です。大通高校だから出来た実践かもしれませんが、このような改革が広くロールモデルになり、拡散することを期待しています。

オンラインワークショップ参加者より

今回の報告を作成するにあたり、ご参加いただいた方々からテーマに基づく感想やコメントをいただきましたので、以下にご紹介いたします。

“知識の「点」と「点」をつなげる”

リンデル儘盟グンナル氏

3月8日に、スウェーデン(ストックホルム大学)と日本(URL: Universal Research Laboratory)をオンラインでつなぎ、若者が社会や国に対してどのような意識を持っているか、また、日本の若者をより活発にするためのアクションをどのようなものにする必要があるかという意見交換のワークショップが行われました。その中で、「目立たない方が美德」や「社会問題は『他人事』」というような話題が出ました。

だいぶ昔の話ですが、1997年から2004年まで我が家の長男と次男が東京都立川市立の小学校に通っていた頃、私は学校評議員やPTA会長などを経験しました。当時彼らが通っていた小学校のスローガンは「自分の頭で考える子を育てる」というものでしたが、実際には、自分の頭で考える子は逆に面倒な存在として扱われていました。当時小学校3~4年生になった次男は、「学校にはシャープペンを持参してはいけない」というような、いろんな「決まり」に対して疑問を抱くようになっていました。ある時その次男が担任の先生に「なぜ持参してはダメなのですか」と尋ねたところ、「面倒くさい子どもだ」と判断され、校長室へ連れて行かれるということがありました。そこで校長先生から受けた説明は「ダメだ。学校がそう決めているから。壊れたら困るでしょう」というもので、結局次男が納得することはありませんでした。

上記のワークショップでは、日本のルールは自明なものではないなどのような意見があり、また、「日本ではルールは絶対変えられないと考えている若者が多い」というコメントもありました。しかし、シャープペンの件然り、単純なものから始めないと、あとで判断をつけることができなくなってしまうリスクもあるのではないかと私は考えています。

日本での約20年にわたる生活を終えてスウェーデンに帰国した後、子どもたちはスウェーデンの生活に慣れていく必要がありました。その中で長女(当時7歳)を学童保育の施設に迎えに行った時の印象深いエピソードがあります。ちょうどおやつ時間が終わろうとする時のことでした。青リンゴが一個残っていて、それをどうするかという話になっていました。保護者の私はその様子を遠巻きに見ていました。子どもが5人いて、一人の男の子が「俺が食べるよ」と言うと、保育士が「いや、他の人も食べたいかもよ。どうするの? そうだったら」と問いかける。男の子は「うん、そうだね。わかんない」

と答える。そこで保育士は「じゃあ、どういうふうに切ったらいい？」と尋ねると、子どもたちはみんな頭をかきながら「う～ん、わからな～い」と悩んでいました。保育士がいろんな切り方を話すうちに、とうとう「みんなが食べられるように切ろう」という子どもたちの声が出ました。その間なんと20分。私はそこで待っていました。なかなか長い時間でしたが、20分ぐらいかけて一個のリングを平等に切るのにどのようにしたらいいかを子どもたちに考えさせた上、問題解決に導いていく。そんな保育士と子どもたちの会話はいかにも面白く、いまだに頭に残っています。

私の子どもたちが通っていた日本の保育園や学童保育などでこのような話になったら、おそらくはこうはいかなかったのではないかと。「はい、皆さん座って！先生がリングを切ってあげるから」などと、そういった話になったのではないかと思います。

私はスウェーデンの教育現場をすべて良しと思っているわけではありませんが、子どもたちに考えさせる、解決法を見つけさせるなど、そういった点ではかなり優れていると思っています。ワークショップでのグループディスカッションで出てきた皆さんの考えを聞いて、私の子どもたちの通っていた日本の小学校や学童保育での自分の頭で考えさせない姿勢、「ルールは変えられない」と子どもにインプットする姿勢が頭をよぎりました。

国際調査などで測った学力では、日本の方がスウェーデンよりも上位にいるようですが、学校で習った知識の「点」と「点」をつなげる「線」が引けるような能力を育むことが日本の教育において行われているのかどうか。子ども（人間）を育てるにはそれが大事だと思います。

さらに「知ることを楽しむ」という気持ちも学校教育で育まれるのが良いと思います。それら二つの能力が育まれれば、一つ一つの知識の「点」は、逆に後から補うこともできると思います。そんなことをワークショップの後にふと考えました。

(ストックホルム大学日本学准教授)

“Prata politik!” 佐藤リンデル良子氏

Prata politik! という80ページほどの冊子がスウェーデンの公的機関である若者・市民社会庁から出版されています。それを1年半前から3人で日本語に訳し始め、去る3月にインターネットで無料ダウンロードできるようにしました(和訳タイトル「政治について話そう!」)。公開後の反響は大きく、現在、冊子化も検討されています。

この冊子はスウェーデンの中学・高校に無料で配布されており、内容はズバリ「学校に政党を招くとき、何をどう考えて実施するか」ということです。実施した後の振り返りについても述べられているほか、各学校の実践例や教師たちの考え方もインタビュー形式で掲載されています。とても具体的な内容で、日本の学校ですぐにでも利用できる部分がありますし、また一通り読むだけでも、日本とスウェーデンの政治教育(あるいは民主主義や主権者の育成、市民性の育成)の考え方の違いがありありとわかる一冊です。

この冊子が特に用いられるのは4年に1度のスウェーデン国会と地方議会の総選挙の時です。中学・高校では

大人の選挙そっくりの形で模擬選挙を行われる伝統がすでに60年代からあり、国を挙げてその実施が推進されてきました。投票を前にして政治を学ぶ際に、その一環として学校に政党を招いて政治家たちと生徒が交流するという手法が推奨されているのです。学校教育法では「政党を招く際には「客観的な選択」をすること」と定められています。「政治的中立」を「学校から政治を遠ざける」ことで保つのではなく、「中立的に政党を選び学校に招く」ことで実現しているわけです。

スウェーデンの教育界では、子どもや若者が「自分にはパワー(makt)がある」と思えるようにすることが目指されています。理念や目標を定めたらそれに向かって確実にアクションを起こしていく、スウェーデンらしさが表れたオススメの一冊です。

(ストックホルム補習校講師、公認ストックホルムガイド)

“Zoomのこれからの可能性” 藤井研三郎氏

Zoomの登場によって、複数でのオンラインコミュニケーションがすっかり身近になりました。今後は子供や高齢者でも簡単に使える、よりシンプルで直感的な操作性のアプリや、ノイズキャンセリング機能等を搭載した音質に優れたイヤホンマイクが続々と登場するでしょう。あるいはリアルに匹敵する臨場感を持ったVRゴーグルで参加出来るアプリも登場するかもしれません。コミュニケーションにおいては、もはや「距離の壁」がなくなったと言えるのではないのでしょうか。

これによって、人々のライフスタイルが大きく変わると言われていますが、その一つとして、都市部から地方への人の移動が起きることを私は期待しています。たとえば東京の会社に籍を置きつつも自然豊かな田舎で子育てをしながら働き(リモートワーク)、オンラインワークショップ等で最新の学びを得ることが可能です。

そしてそれ以上に期待しているのが、独居老人や不登校・引きこもりの人々が外の世界とつながるチャンスが生まれることです。実際に住んでいるリアルの地域社会だけでなく、オンライン上では趣味や遊びのグループ、各種勉強会のグループなど、複数の社会に所属することが可能になります。地域社会で孤立したとしても、オンラインで複数の社会に所属することで孤独感が減少し、学校でいじめられている子どもたちも、オンライン上に「安心できる場」があれば、自傷行為や自殺を思いとどまってくれるかもしれません。

Zoomを始めとするオンラインコミュニケーションツールが、人生を豊かにしたり、セイフティーネットとして活躍したりする時代が一日も早く実現することを期待しています。

(「スタディコンシェル」代表、Zoomコーディネーター)

“大人も変わらなければならない” 浦野真理氏

今回のオンラインワークショップでは、日本財団18歳意識調査から得られた結果の内、二点に焦点を絞りました。一つ目は国の将来への悲観意識。日本の将来を「よくなる」と答えた18歳はわずか9.6%でした。二つ目は「自分で国や社会を変えられると思う」に対し「はい」の回答が18.3%だったことです。いずれも調査対象国で最も

低い数字です。私はこれらの「理由」が重要だと考え、当事者世代の知人 11 名に事前アンケートを行い、当日紹介しました。彼らの回答は「高齢化と少子化。解決すると思えない」「政治が高齢者ばかりを向いている」「ルールに従わせる教育を受けてきたため」「将来を悲観し国や社会を変えられないと思っているのは若者だけではないはずだ」…こうして見ると、18 歳の若者よりも、社会や大人に問題があると思えてなりません。ストックホルム大学の学生エドさんは「もしグレタ・トゥーンベリさんのような行動を起こす若者が現れたら、日本ではどう思われるでしょうか？」と日本側に投げかけました。私たちの回答は「批判を浴びる」「主張の中身でなく人物への批判に集中してしまう」など否定的なものでした。また、韓国から来訪中のジヘさんが、韓国で市民運動が盛り上がり実際に政治を動かした最近の経験を聞かせてくれました。調査が示すように日本には社会を変えようと思う若者が少ないわけですが、もし勇気ある若者が行動を起こしても、うまくいかない環境にあります。大人こそ変わらなければならない。私はそう思います。次のアクションを考えるきっかけになり、記憶に残るワークショップとなりました。その後、スウェーデンのエドさん、韓国のジヘさん、日本側の豊原さんと僕は定期的に意見を交換しています。国を越えた私たち 4 人のディスカッション内容を今後発信したいと思っています。

(URL: Univesal Research Laboratory 代表)

“若者はどのような教育システムで学ぶべきか
一次世代の学校システムの提案” 西浦和樹氏

最近になって、スウェーデンの活動家グレタ・トゥーンベリ (Greta Thunberg, 2003-) さんは、「気候変動のための学校のストライキ」というテーマを掲げて、地球温暖化によってもたらされる気候変動への対策強化を呼びかけました。この活動は世界中に広がり、2018 年の国連気候変動会議での演説が取り上げられ、彼女は次世代の若者のロールモデルとみなされるようになりました。

しかしながら、日本では若者のロールモデルとなる人物を生み出しにくい仕組みがあるのではないかと言われます。それを裏づけるように、日本財団が行った 18 歳意識調査「第 20 回社会や国に対する意識調査」の結果が公表され、他国の若者に比べて、日本では「自分で国や社会を変えられると思う」という回答した若者が約 2 割で、両者の意識の違いが際立った結果となりました。

「自分で社会を変えられると思う」と考える日本の若者が少数派なのは、なぜなのでしょう。この理由の一つは、長年の受験勉強とその後の競争社会システムに適應した結果、日本の若者が 2 割の勝ち組と 8 割の負け組に選別されているのではないかと考えます。失敗が許されない社会ということも影響しているのではないのでしょうか。

一方、北欧スウェーデンでは、自分で何でもすることで高いモチベーションを保つことができる、すなわち変化を起こすマインドが形成されやすい風土があると考えます。このような社会システムでは、セカンドチャンスやサードチャンスがある、多少の失敗が許される社会となっていることも見逃せません。

このことを踏まえて、若者が所属する「学校」という教育システムを説明するロジックモデルを考えます (下図参照)。日本の若者の育つ学校システムは、過去に起こった知識体系が整理された教科書中心の学びですが、スウェーデンの若者が育つ学校システムは、時々刻々と変化する社会問題を取り上げる経験主義的な学びです。

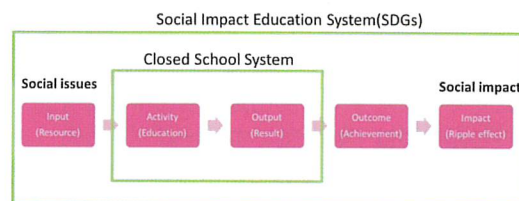


図 社会変革理論による教育システムのロジックモデルの例

SDGs 教育のような幅広い視点での学びを取り入れた次世代の学校システムは、社会と学校との壁を取り払ってこそ、最大の教育効果を発揮できると考えます。

(宮城学院女子大学教授)

おわりに

OECD の PISA 2018 (2019 年 12 月 3 日公表) の結果によれば、日本では生徒の 59% が「困難に直面したとき、たいい解決策を見つけることができる」という見解に「その通りだ」又は「まったくその通りだ」と回答しました。(OECD 加盟国平均: 84% の生徒)

日本の若者の自己効力感が低いことが明確になっています。また、4 月の NECO 塾セッションに参加した大学生が次のような感想を寄せてくれました。

「今回のワークショップのように自己肯定感の高い大人の中で自分の意見を言うことは、大学生の私には勇気が必要だった。自分の意見は自信がないと伝えられない。今回のように様々な人と話をする経験を重ねることで少しずつ自信が生まれ自分の意見を言うことが出来るようになると思う」

西浦和樹先生 (宮城学院女子大教授) にご紹介頂いた社会課題解決中 MAP は非常に興味深いですね。日本の若者と海外の若者がコラボしてこのサイトに提案してもらうのも具体的な一案かもしれません。

社会課題解決中 MAP
<https://2020.etic.or.jp/>

冒頭に書いたように、日本の若者の社会や国に対する悲観的、消極的な意識は民主主義の危機でもあります。この問題は引き続き全国民が取り組み、アクションをとるべき課題でしょう。

川崎 一彦 Kazuhiko Kawasaki

北海道東海大学教授、東海大学教授を経て 2013 年から東海大学名誉教授。スウェーデン交流センター評議員。

平成 30 年度外務大臣表彰、2019 年 3 月スウェーデン北極星勳章受賞。



スウェーデンのコロナ対策、勧告と規制について

皆さん、こんにちは！お元気ですか～^^～

今回は今世界を騒がせている新型コロナウイルスのお話。スウェーデンのコロナの対策について話していきたいと思います。規制が少ない国だと言われています。確かに少ないです。スウェーデンは勧告の方が多いですが、規制がゼロなわけではありません。その勧告と規制についてお話したいと思います。



因みにお話しする前に、今回の記事を書くにあたって一番多く目にしたスウェーデン国外の人の疑問にちょっと触れておきたいと思います。「スウェーデンは集団免疫を獲得しようとしていますか？」という質問をよく目にしました。それに関して、スウェーデンの公衆衛生庁は、

「スウェーデンのコロナ作戦は集団免疫を獲得することではない。コロナの感染拡大を遅らせることと、コロナに対し脆弱なグループを感染から保護することがスウェーデンのコロナ作戦だ。」

と5月14日に記者会見で発表しました。

スウェーデンのコロナ対策は海外でもスウェーデンでも賛否が分かれていますね。それを分析したくても、まだ分析するには難しいようです。データがまだ足りませんし、免疫学の知識が浅い私には、正直な所スウェーデンの対策がよいかどうかを判断するのは難しいです。

ですが、6月3日にスウェーデンの公衆衛生庁疫学責任者、アンデシュ・テグネルさんが「改善の余地があります」とスウェーデンラジオのインタビューに言っていました。

他の質問、たとえば「なんで学校が閉まらないのか？」などの質問には、インスタグラムのストーリーハイライトで回答させてもらっています。そこには「コロナの日常」、「コロナニュース」、「コロナ質問」という三つのハイライトがあります。そこに情報と写真もアップしています。スウェーデンのコロナ状況に興味ありましたら、そちらも是非ご覧ください。



インスタグラムの画像から、矢印で示したところにハイライトがあるので、ぜひ見てみてください！

Instagram
instagram.com/wagasueden

たくさん書きたいことがあるのですが、上手くまとめるのは大変ですね。それに、この記事が皆さんの目に留まる7月にはおそらく新しい情報などがあって、ここで書いてあることが古い情報になってしまっている可能性もあります。一応これを書いているスウェーデンの6月上旬の情報として受けとってください～^^～

今までの勧告や規制

手を洗うことや距離をとることなどと言った、どこの国でもある勧告以外には、スウェーデンの現在の勧告をいくつか挙げれば、

- ・風邪症状（軽くても）を感じたら人に会わないこと。元気になっても（つまり症状がなくなっても）、学校と仕事に行く前には二日間自宅待機すること。
- ・勧告ではないかもしれませんが、コロナの質問（症状以外なら）一応 11313 という、スウェーデン全国の情報ラインに電話することができます。症状の判断、または診療場所についての情報を聞き取れば1177という看護師による24時間受けられる電話緊急対応に電話すること。
- ・悩みごと、心配ごとについて誰かに話すこと。

精神的に苦しいと思っている人たちは多いので、自分の抱えている悩みごとや心配ごとについて、スウェーデンの公衆衛生庁のホームページでは、それに対するアドバイスが書かれています。たとえば、スウェーデンではさまざまな無料サポートラインが利用可能です。年配の方々のライン、コロナ危機の赤十字社ライン、オンコルフエロー（主として夜間、家族のことや仕事のこと、自分の病気のことなど、色々な事の話し相手になってくれる電話サービスで、スウェーデンでは Jourhavande Medmänniska といいます）、女性ライン、男性ライン、自殺ライン、いじめのサポートラインなど、ちょっと検

索しただけで出てくるスウェーデンのサポートラインの多さには自国民ながらびっくりしてしまいました。

そしてスウェーデンの公衆衛生庁のホームページには、他のアドバイスとして、

- ・寝る前にニュースを読まない、見ないこと。
- ・情報を得るときに批判的な考え方を持つ重要性和、信頼できるソースから情報を取得すること。共有する情報も検討すること。
- ・いつまでもコロナの流行時期は続くものではないと、前向きに捉えること。

と言ったこともあります。上記に述べた1177のホームページでも、心配ごとに対するアドバイスが書いてありますね。

一つ大切なのは、自分が感じている気持ちを大事にする、その気持ちを認める許可を自分にあげること。そうすることで解決につながっていきますね。心配をする理由や解決方法もたくさん書いてあります。

子供のための記者会見というものもありました。その時には子供の質問に対して政治家やスウェーデンの公衆衛生庁の方々が真剣に答えていました。スウェーデンでは子供が新聞を作るということもありますので、子供の記者もいました。

子供にどうやってコロナのことを話せばいいかというガイドもスウェーデン市民緊急事態庁が提供しています。社会における子どもの権利協会などにも子供のサポートラインがあって、悩みごとや心配ごとを感じた時には話すことが大事という考えのもと、それに対応したサポートが用意されていることが多いです。

スウェーデンへの渡航制限

一応6月30日までです（6月12日現在）。

例外はあります。たとえば、スウェーデン国籍を持つ人ならこの制限はあてはまらないです。因みにスウェーデン外務省はavrådan（推奨の反対で、“強くお勧めしない”という意味。日本語ではどんな表現が適当でしょうかね？）という形で旅行する前に国民に熟慮を呼びかけています。これが今のところ7月15日までの予定です。

老人ホームへの立ち入り禁止

スウェーデンでは、今全国的に老人ホームに訪問してはいけないという決まりがあります。感染～死亡リスクグループのレベルが高い年配の方々を守るためです。ですが老人ホームの責任者には、立ち入り禁止の免除を正当化できる特別な状況があり、コロナウイルス拡散のリスクが小さい場合には、個人の場合に限って立ち入り禁止の免除を認めています。



50人以上の集団はダメ！

3月29日（日）から、公開集会および公開イベントでは最大50人の参加者が認められていて、禁止事項に違反するイベントを主催した場合、罰金または禁固刑を科される可能性があります。

レストランの混雑禁止

レストランが混雑状態にならないためのルールがいくつかあります。それらのルールを守ることができなければ、レストランは営業停止の処分を受けます。

Afterord ~あとがき~

今世界中でアメリカの事件を端に発した「ブラックライブズマター」の運動が広がりを見せていますね。つい先日スウェーデンでもデモがありました。

スウェーデン人は「白人で金髪、そして目が青い」というイメージがあるけれど、実際はそうではないです。スウェーデン人はいろいろな見た目の方々がいて、こういったことをちゃんと紹介できていないな～ってちょっと反省しました…。

私もこの問題にちゃんと向き合いたいと思っています。私はブラックライブズマターの運動をとっても応援していて、インスタのハイライトでいろいろ情報載せていきたいと思っているので、是非見てください。世界中の皆さんに関係あることだと思います。

Author ソフィア・マルム



Sofia Malm

2010年高校を卒業後、日本に留学。カイ日本語学校で学び、帰国後日本語能力試験1級を取得。

ダーラナ大→ウプサラ大→ストックホルム大を渡り歩き日本語/日本学を修了。途中2015年に京都大学に1年の留学を経て、2017年6月ストックホルム大学日本学科を卒業。いわゆる大学移民。好きなものはおにぎり、赤飯そしてマグロ丼。

スウェーデンの生活についてインスタグラムとツイッターもやっていますので、スウェーデンに興味があったら、是非見てみてください！

Instagram: [instagram.com/wagasueden](https://www.instagram.com/wagasueden)

Twitter: twitter.com/wagasueden

ブログ: <https://wagasueden.hatenablog.jp/>

ブログ引越しました、登録よろしくお祈りします！

今回の記事作成にあたって参照したサイトです。

- Folkhälsomyndigheten（スウェーデン公衆衛生局）
<https://www.folkhalsomyndigheten.se/>
- 113 13（スウェーデンの非常事態情報電話番号サービス。より緊急性が高いものは“112”）
<https://www.sosalarm.se/trygghet/viktiga-telefonnummer/11313/>
- 1177 Vårdguiden（健康に関する情報を提供するサービス）
<https://www.1177.se/Stockholm/>
- スウェーデン政府公式ウェブサイトより
<https://www.regeringen.se/pressmeddelanden/2020/03/natinnellt-besöksforbud-pa-aldreboenden/>

気分は北欧生活。

スウェーデンヒルズ Since 1984
Sweden Hills

札幌郊外の丘に北欧の街並。 スウェーデンヒルズ。

大都市近郊でありながら自然に囲まれた美しい街並。
「人が人らしく、自然と調和して豊かに暮らす」を理想に、
スウェーデンの住環境を再現した住宅地として誕生以来30年。
美しい風景の中で約300家族の暮らしが息づいています。

0120-242-522

スウェーデンヒルズ ウェスト地区 レクサンド公園

賛助会員入会のお願い

一般財団法人スウェーデン交流センターは、ガラス作品や木工作品の制作などを通して多方面での交流を行うとともに、夏至祭、ルシア祭、各種展覧会など、年間を通して様々な催しを行い、スウェーデン文化の紹介を積極的に行なっています。

特に「世界一臭いスウェーデンの発酵にしん」スールストロミングの試食会を毎年開催し、多くの皆様からご好評を頂いております。

これらの催しは、当センターの趣旨にご賛同くださる皆様が賛助会員としてその運営基盤をささえてくださっており、毎回の催し等は、広報誌「ビョルク」にも掲載し、賛助会員の皆様には、年4回ご自宅まで郵送、いち早く情報提供しています。ぜひ賛助会員にご入会下さいませよう、お願いいたします。

賛助個人会員 年会費 ー□ 5,000円

賛助法人会員 年会費 ー□ 20,000円

あともがき

●昨年末から世界を騒がせている新型コロナウイルス肺炎の影響は北海道でも大きく、道内各地で予定されていたイベントの中止を余儀なくされました。SCFもスウェーデンヒルズの夏のメインイベントであった夏至祭が中止となり、フィーカやスウェーデンセミナーなどの人を呼ぶイベントを開催できない状態が続いていますが、春から始めているオンラインでの取り組みには多くの方にご参加いただいております、新しい情報発信の形としてこれからも取り組んでいきたいと思っています。

●6月7日（日）にスウェーデンと日本を結んで開催したオンラインコンサートは、日本とスウェーデンだけでなく韓国からもご参加いただくことができました。今後も定期的に開催していきますので、お楽しみに！